

【入選】

【水は山の幸、人の幸】

佐野日本大学中等教育学校 三年 高橋 茉鈴

熱いシャワーを浴びながら大声で歌う。私のリフレッシュ法だ。だが「水」について考え始めた今、他の方法を探りたいと思った。地球で最初の生命が生まれた海、八月一日生まれの私は、「水の日」に緑を感じている。私が生まれ育つ佐野市には、古来関東屈指の清流といわれた渡良瀬川が流れている。しかし、明治期に足尾銅山から流れた鉱毒の影響で、生息する魚が次々と姿を消し、戦後も沿岸に工場進出が相次ぎ、川の汚染は続いたという。鉱毒被害と戦った佐野市の偉人、田中正造の足跡を学ぶ市民らが「サケが遡上する清流を取り戻そう」と一九八二年正造の七〇回忌に合わせて、サケの放流を始めたのだ。私も小学二年生から自宅でふ化させた稚魚を放流する活動にも参加している。毎年無事に戻るよう願って送り出す。最近では渡良瀬川でふ化し、産卵に戻ってきたサケもいるのではないかと聞かれており、母のような気もする。煙害等で荒廃した足尾の山に木を植える植樹活動にも何度か参加している。緑の山を取り戻すには二〇〇年かかるとも言われているが、人間が責任を持って続けるべき活動だと思っている。蛇口から水が出て当然、川に水が流れていて当然だというのは錯覚だ。山に木があるから降るべき雨が地中に浸かり込んだ地下水となり、時間をかけて地表に湧き出てくる。森は、緑色の貯水池なのだ。森林を守り育てる担い手達がいて、初めて森林はその重要な機能を果たす。そして私達は水に恵まれ水害から守られているのだ。水と森と土と人。この関係が良いと地球は潤い、心が満たされるのだと思う。「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし。」「正造翁の教えが改めて胸に突き刺さる。日本では世界一きれいな水が当たり前になっているが、クアラではきれいな水を飲めない国が多いの現状だ。私は今年マレーシアにホームステイをする事になっているが、クアラルンプールの名前自体「泥の川の町」を意味する。実際は少し郊外に行けばきれいな川も流れていて、水質は問題ないともいう。ただし水道管自体が錆びついていてフィルターを毎月替える家庭が多いらしい。説明会での注意点到「シャワーは五分以内」とあり頭では分かっているものの正直驚いた。「川や森」という意識はこれからも大切にしたいが、まずは日々の生活を見直す良い機会だと思いい、五分間練習を始めた。髪をよく解かしてからシャワーを浴び、シャンプーは出来るだけ少量を手で泡立てて洗う。残り三分。ここで水を止め、全身だ。挑戦すると達成感を味わえ心まですっきりした。語学や文化を学ぶ機会に加え、「世界の水」を考えるきっかけとなった。現在世界の七億人が水不足の生活をしているという。しかも、不衛生な水が原因で毎日四九〇〇人の子供が亡くなっているのだ。二〇二五年には世界人口の三分の二が水不足になると予想されている事に驚いた。その原因の一つが輸入に頼っている日本の仮想水によるという。つまり大豆や小麦、牛肉等の生産に必要な水を八〇〇億トン、日本の水使用量全体と同じ量を海外で消費しているというのだ。私達は想像以上に途上国の生活を破壊していることに気が付かなければならない。そして、水の危機（無駄遣いしていること）を知り、徹底した節水（風呂、洗濯、トイレ、洗面、炊事、庭の水まき）をして

いこうと思う。又できるだけ国産品を利用し、仮想水を減らすという意識をしていきたい。熱いシャワーでのリフレッッシュより大切なことが分かった。水は山の幸、そして人の幸。疲れたら水を見て木を思い、木を見て水を思い、生かされていることに日々感謝である。こうして私の心は満たされていく。

【佳作】

【蛇口から水が出る幸せ】

佐野日本大学中等教育学校 一年 阿部 康佑

私たちは、普段生活をする中でたくさんの水を利用してゐる。飲料水はもちろん、炊事や洗濯、入浴など、私たちの生活のいたるところには水は関わっている。また、野菜や肉などの食料も、水を与えなければ育たない。しかし、私たちは普段の生活で水がなくては困ることはない。なぜなら、水道の蛇口をひねると、いつでもきれいな水が出てくるからだ。私の住む栃木県小山市には、そのきれいな水をつくって送り出している浄水場がある。小学校三年生の社会科見学では、羽川にある浄水場を見学した。思川からくみ上げた水をろ過、消毒し、厳しい検査を受け、それをクリアした水だけが、全家庭の水道に送り出されるのだということを知り、私はその時知った。水に異常があればすぐに分かるような工夫もされており、自分が普段当たり前のようになっている水道水は、こんなにも厳しく管理されているのかと思つた。それから、毎日目にする水道水への見方が変わった。きれいな水をつくるためには、多くの人の尽力が必要であるということを知り、いつも蛇口をひねれば水が出るということのありがたさを実感した。また、浄水場を案内してくださった職員の方の、「川に油などが混入すると、きれいにするには大量の水が必要になる」という話も心に残っている。水道水のもととなる思川周辺でバーベキューをしていた人が、使用後の食用油や食べ残しを川に捨てたことで水道水に支障をきたしたという、実例をもとに話をしてくださったのだ。このころ、私は路上にゴミを捨てることであつたので、自分の軽はずみな行動のために他人が大いに迷惑することがあるのだと、深く反省した。同時に、自分の故郷をきれいにしたいと思つた。このきれいな水を今後も守り続けるために自分ができることはないか考えてみた。一つ目は、水に流す汚物の量を少なくするということだ。洗剤の使用料を少なくし、食事の食べ残しを直接排水口に流さないなど、現在の生活のなかで対策があるはずだ。二つ目は、水を使いすぎないことだ。シャワーの水をこまめに止めたり、炊事に使用する水の量をおさえたりなど、方法はさまざまだが、水道水の無駄な使用をやめ、まちにやさしい暮らしをつくる第一歩とするのだ。節水は、環境にやさしい暮らしを築き上げる上で重要なことだと思ふ。三つ目は、ゴミを出しすぎないことだ。場合によってはゴミが川に流入してしまふこともあるし、そうでなくてもゴミを燃やした煙などで川が汚れてしまふ。ゴミの出しすぎは、川によいことを与えないはずである。エコバッグを使用してレジ袋をむやみにもらわれないことや、食料を必要分だけ買いそろえることなど、自分たちで意識すればゴミは自然と少なくなる。それは、川や水を守るといふだけでなく、自分たちの暮らすこの環境を守ることにもつながるはずだ。こうしたことを意識しながら生活することで、きれいな水道水を未来に引き継いでいきたい。蛇口をひねると水が出る幸せを絶やさないためにも、自分たちの行動で未来は変化するという意識をもち、自分の故郷がいつまでもきれいな町でいられるよう、努力していきたい。そして、水の大切さを、この先の世代にも受け継いでもらえるようにしていきたい。

【佳作】

【水の命を守りたい】

下野市立南河内第二中学校 三年 星 愛優香

私は、学校の社会でこんな写真を見たことがある。その場所はアフリカなのだろうか。民族衣装を身に纏った女性や子どもが、川で水を汲み、背中に背負い、両手にも持つ姿。私はその写真がどうしても理解できない。なぜ水汲みなど、今の時代に行っているのか。疑問を解決するため、図書室へ行き本で調べてみた。調べてみると、世界の水の状態がよく分かった。今、この地に住む私は、喉が渴けば水が飲みたい時にすぐ飲める。ただ蛇口をひねるだけ。それに、飲みたいだけ自由に飲める。蛇口からはいつまでも水は出続ける、ずっとそう思っていた。しかし、開発途上国での現状は違った。まず、生活に使うための水など、近くに存在しない。何キロメートルも歩き、水汲みをしなればならない。私が見た写真は、きつとサハラ以南のアフリカ諸国なのだろう。女性が伝統的に水汲みの仕事をするらしい。想像をしてみた。もし私が何十リットルもの水をはるか遠い地まで運ぶとしたら。とても大きな労力だ。生活に必要な水を手に入れるため、そこまですらないといけないのだ。日本では考えられない現実だと思う。そして、多くの労力を使っても、きれいな水は手に入らない。下水処理が行われていないため、汚染された水を使う人々の間で病気や死をもたらす。そのような水を飲んで、下痢になり、一日約四千人の児童が亡くなっている。私はとても心が痛んだ。水がきれいなのは当たり前と思っていた。私とほとんど変わらない年の子どもが、私の知らない地で命をたぐさん落としているのだ。まだこれからやりたいことが数え切れないほどあるだろう。衛生な水を飲めないが為に亡くなる。その地に住む子どもたちが決して悪いのではない。そのような途上国の現状を知らない人が多い、知っていても見て見ぬふりをする先進国が悪いのだ。途上国が先進国のような水を得られたら、人々の生活はどう変わるのか。私は、こう考える。女性は伝統的な水汲みの仕事がなくなくなり、他の仕事で活躍できる。つまり、女性の社会進出だ。もし女性の社会進出が進めば、男女平等の世界に近づくはずだ。水が得やすくなれば、良い社会の循環をつくることができる。とてもすばらしいことではないか。先進国は、男性も女性も同じ場で輝いている。男はこの仕事、女はこの仕事という役割の違いの関係は崩れるだろう。そして、もう一つ良い事が起こると思う。それは、子どもの就学率が向上することだ。アフリカの地域に住む子どもは家の仕事を一日中行うため、学校へ通えない。水汲みがなくなくなると、毎日義務のような仕事がなくなくなり、自由になれる時間が作れる。そうすれば、アフリカなどの子どもで学校に通える人が増える。また、きれいな水が飲めれば、死亡者も減る。このように、水不足や水の衛生が改善されると、良い環境が生まれるのだ。労力とお金の心配がなくなり、やがて貧困から脱出できる。では、どうすれば世界の水の状態を変えられるのか。私にもできることはないだろうか。まずは節水を心掛けること。先進国で、水も豊かである日本では、水がいつでもあってもきれいなのは当然だと思っている。しかし、水が足りなく、更に汚ないと困っている地域は多いのだ。日本人一人一人が節水を心掛ければ、小さな節水も大きな節水となる。そして、日本の技術を提供

すること。水をきれいにする技術を教えれば、死者も減る。これは、今の私には難しいが、大人になったら知識をつ
けアフリカなどの地を訪ね、世界に貢献したいと思う。水は私たちの生活に欠かせない。水は命だ。この命を私は絶
対守りたい。水の恵みに感謝し、水環境を守るため、努力していきたい。

【佳作】

【水を大切に】

佐野日本大学中等教育学校 一年 尾崎 さくら

五年前の春、私は親せきの法事に出席するため千葉県君津市にある久留里という町に行きました。久留里は君津市の内陸部、房総半島の中央部に位置する、人口三百人弱の小さな町です。久留里の町に入ると、いろいろなところに井戸があり、ペットボトルを片手に水くみの順番を待っている人たちが大勢いました。母になぜかとたずねると、「久留里の水は千葉県で唯一「平成の名水百選」に選ばれたとてもおいしい水なのよ」と教えてくれました。久留里は昔から町の中に井戸がたくさんあり（現在は約二百本）、町の人は生活用水として利用しているそうです。この井戸水は、チカ六百メートルから自噴していて、春夏秋冬二十四時間豊富な水がこんこんとわき出ているそうです。山林に降った雨水が地層をくぐってろ過され、久留里方面の井戸にわき出ているため、この井戸から出る水は水質がよく水にふくまれる有用な成分、そしておいしいことから、「久留里の生きた水」と呼ばれ、人々に愛されているそうです。この大切な資源である水を守るために、久留里の人々は保全活動にも力を入れてしていると親戚のおばさんに聞きました。おばさんの家では、食器洗いに使う洗剤を自然にやさしい合成界面活性剤を使用していないエコ洗剤を使っているそうです。食器洗いのはときは、おけに水をため、必要最低限の水を使うようにし、山林や町の中にゴミが落ちていけば拾っているそうです。「誰にもできる、ほんの少しの優しさや気遣いが、このおいしい水を守っているのよ」と笑いながら話してくれました。私たちは、普段、蛇口をひねれば安全で安心なきれいな水を飲むことができます。トイレもお風呂も、使いたい時に使用することができます。こんなに便利で快適な日本に住んでいると当たり前のことになってしまっています。世界に目を移してみると、私たち日本人がとても恵まれた環境にいることがわかります。例えば、水道設備があっても日本のように高度な浄水処理をしていないために水道水が飲めない国、砂漠が多く雨の少ない中東諸国のように、得られる水の量以上に水を必要としている国もあります。このような国の人たちに、水を支援するなどという大きなことは私にはできませんが、大切な資源である水を守る手助けが私にもできないだろうかと思ひ、インターネットで調べてみました。すると、たくさんの方が書かれています。その中には私にもすぐに取組め、続けていけそうなこともありました。お風呂で顔や体、髪を洗う時など、今までは出しっぱなしにしていたシャワーを、一回一回こまめに止めて水を大切にすることです。数年前に聞いた久留里のおばさんの話がふと頭をよぎりました。ほんの少しだけけれど、私にもできる優しさ、これだと思いました。誰の手も借りずに、私一人でできることです。明日からはなく、今日、今すぐにでも実践したいと思いました。久留里での法事からの帰り道、私はもちろん「久留里の生きた水」を飲みました。自分でくんだ水はとても冷たく、そしてまるやかでおいしかったというのを、数年たった今でも覚えています。あのおいしい水がなくならないように、世界で水不足と戦っている方たちのもとへ安全な水を少しでも多く届けられるように願いをこめ、今日から私にできることを、一つ一つ実践していきます。

【入選】

【水鏡と私】

下野市立南河内第二中学校 一年 星 優莉香

私にとつての水。身近なもので、なくてはならないもの。そつと、目をつむり心に浮かぶもの、それは「祖父の大切にしている田園の水」だ。祖父母の家は栃木県、福島県、茨城県の県境にある。とても山あいにある村里だ。八溝山という、大きな山のふもとにある。山の小川には、ヤマメが住んでいる。ヤマメは、とてもきれいな水に住む魚である。そして、那珂川にはアユというおいしい魚が住んでいる。釣り人にとつては、アユも釣れ自然豊かな場所だ。私は、祖父と一緒にドジョウやサワガニをとつて遊ぶ事がある。祖父との思い出が沢山つまった場所である。水がきれいだということは、とても素敵なことだと思う。幸せだなあ、と感じる瞬間だ。魚も泳ぐ、きれいな水、そんな町であつてほしい。水資源豊かな国であつてほしいと思つた。私の祖父は、七十五才になるがもう何十年と米作りにはげんでいる。おんこうな祖父は、この苗を育てる事を「稲の赤ちゃんを育てる」と言う。その時私は、祖父らしい優しい言葉だなおだやかな気持ちになる。祖父の苗への愛情だと思つた。そんな祖父の笑顔が消えた年がある。私が幼稚園を卒園する年に東日本大震災が起きたからだ。自然災害というものは大変おそろしい、人間の力でコントロールできるものではない。多くの人がつらく悲しい思いをし、ここ数年大変な努力をし、乗りこえてきたことだろう。私はこの東日本大震災の後、小学校生活を六年間過ごしてきたが、人と人が助け合うということ、協力し合うことの大切さを学んだ。震災のあつた年、祖父の笑顔が消えたそのわけは、稲の赤ちゃんだと言つて自分の子供のように大切に育ててきた苗を植えられなかつたからだ。苗はハウスで適切な温度管理、水の管理を必要とし、農家の人にとつては大変な努力が必要だ。しかし、栃木県と福島県の県境にあり、八溝山のふもとにある大田原市は放射能を心配し、田んぼの一つ一つを水質検査したそうさ。その結果、心配いらぬことと少しおくれで田植えができたそうさ。その時、祖父は私にこんなことを言つた。「八溝山が皆を守つてくれたんだな」豊かな山林、おだやかな川、私達の生活が守られた瞬間だつた。この年の春、田んぼ一面に水を張り、青空の下で田植えをした。祖父の姿が幼かつた私には印象に残つた。こんな思い出もある。祖父と私が並び、田んぼの水をのぞきこむ。なんと、鏡に写つたように私と祖父の姿が水一面に写しだされる。とても気持ちの良い水鏡だ。自然の豊かさが生み出した水の恵みだと感じた。祖父の田園は、全て山からの山水で米作りをしている。大変おいしい米である。山水で作られる水資源の豊かさ、祖父の愛情を感じる米である。水と聞き、皆は水道から出る水、飲料水を思い浮かべることだろう。私もその一人だ。私は、祖父の家の水が大好きだ。井戸水で、とても冷たくておいしい。じゃ口をひねると冷蔵庫で冷やしたよりも冷たい水が出てくる。祖父と畑仕事をした後、大きなオニヤンマを追いかけた後、その後には飲む水はとてもおいしい。幸せだなと感じ、このコップ一杯の水が心をうるおしてくる。最高だ。私にとつての水とは、生活の一部でもあるが、祖父との大切な思い出、田んぼの水に写し出される山々、そして水鏡のように田んぼをのぞきこんだ者の姿が水

に写しだされる。そんな豊かな水資源国、日本。私は、これからもこの水の豊かさが続いてほしいと願う。おだやかな水の流れを見ている人の心も、自然とやすまる。水の持つ力は、人間の食生活を支え、生きる全ての力となっている。水に感謝をしよう。水鏡に写る私と祖父の姿がこの先もずっと笑顔であり続けよう。